

論文の内容の要旨

論文題目 歴史物語の創造

氏名 福長 進

本論文は、官撰国史の編纂が杜絶した後の歴史叙述の展開をふまえて、仮名文の歴史がどのような叙述のシステムによって、どのような歴史叙述を達成したかを追究する。

官撰国史杜絶後、私撰国史（『日本紀略』等）や仮名文の歴史（『栄花物語』『大鏡』等）が編まれた。その第一部が六国史の抄出である『日本紀略』は第二部を宇多天皇から書き起こし、『栄花物語』も宇多天皇から起筆し、ともに官撰国史すなわち六国史を継ぐ姿勢を示している。『日本紀略』は、第一部が六国史の抄出であることから窺えるように官撰国史に範を仰いでいる。一方、仮名文の歴史（いわゆる歴史物語）の嚆矢である『栄花物語』は、歴史編述の担い手・歴史叙述のシステム・歴史叙述の対象のいずれを取っても官撰国史と一線を画しており、その歴史叙述の内質の多くは、仮名文でもって可能態の歴史を作り上げた『源氏物語』の営為によってもたらされた。また、ともに藤原道長に至る藤原北家発展史を描く『栄花物語』と『大鏡』はそれぞれの扱う時代が重なり、『大鏡』は、先行する『栄花物語』がかたちにした歴史の再対象化であり、『栄花物語』とは異なる政治的立場に拠っていると思しい。『大鏡』のかかる営みの背景には摂関家を取り巻く政治的動向が絡んでいる。

このように『栄花物語』『大鏡』を中心に据えて仮名文の歴史が生み出された文学史的環境を明らかにするとともに、『栄花物語』『大鏡』において既成の歴史叙述のスタイルがどのように解体され新たな編述のシステムが編み出されているか、あるいは両作品の歴史叙述のシステムと歴史叙述の内質とがどのように連関するかを具体的に検証し、歴史叙述の営為の展開という大きな議論の枠組みの中で『栄花物語』『大鏡』の位相を定立することを試みた。

第Ⅰ部・第一章『栄花物語』の対象化の方法——原資料を想定して読むことについて——、第二章『栄花物語』の原資料取用態度——『紫式部日記』と巻第八、初花との比較を通して——は、原資料を取捨選択し、どのような加工を施して『栄花物語』の歴史叙述が作り出されているか、その編纂物的性格について検討を加えた。第一章は、原資料を想定しながら遡及的に読むことの可能性について論じ、第二章は、唯一、遺存する原資料『紫式部日記』によって作られた初花巻の編述過程を、両者の比較を通して追尋し、『栄花物語』的歴史叙述のあり方の一端を確認した。

第Ⅰ部・第三章「『今』の表現性」は、『栄花物語』の歴史叙述の基本的なあり方について論じた。すなわち、『栄花物語』の編者（語り手）が、編年的時間軸に沿って叙述の立脚点を移動させて、絶えず出来事現在で諸事象を捉え、それに個々一回的に意味を付与することによってなされていることを明らかにした。第四章「編年的年次構造」は、『栄花物語』の安定的な歴史叙述を支える編年的時間構造が官撰国史の編年体をそのまま受け継いだものではなく、『栄花物語』の志向する歴史が「天皇を基軸とする後宮史」から「九条流発展史」へと方向転換する過程の中で獲得されたことを、巻第一、月の宴の村上朝史に検討を加えて、明らかにした。また、編年的年時構造からの逸脱が窺われる巻第十五、疑に注目して、逸脱を促す要因として、巻第十五以降に見られる道長の人生史に即応する歴史叙述の傾向と連動することを指摘した。第五章「明暗対比的な構成」は、編者の歴史認識を付託する視点人物を導入して、歴史を明暗対比的に捉える叙述に着目し、的確な視点人物の導入によって広い視野からの歴史展望をもたらしたが、そもそも部分的に視点人物を導入することは、全知の立場で俯瞰的に歴史を捉えることとは異なり、第四章で明らかにした『栄花物語』の基本的な歴史編述と変わらないことを論じた。

第Ⅰ部・第六章「歴史叙述と系譜——永平親王暗愚譚の位置づけ——」、第七章「歴史叙述と系譜・再論」は、編年的年時構造とともに『栄花物語』の世界を支える系譜について論じた。第六章は、系譜が諸事象に対する意味付与の回路になっていることを明らかにするとともに、巻第一、月の宴の巻末に位置する永平親王暗愚譚が巻第十、日陰の蔓で再対象化されているが、両者の異なる系譜の切り出し方に注目して、同一の話柄でありながら意味付与が異なることを論じた。第七章は、巻第四、見果てぬ夢に見られる長大な系譜記述、および入内記事に付随する系譜記述に検討を加えて、系譜記述が単に登場人物の人間関係を提示する役割を越えて、歴史を捉える視角を示すのみならず、多義的に読解されるべき歴史叙述そのものであることを論じた。

『栄花物語』の歴史叙述が「九条流の発展史」を志向していることは第四章で確認したが、第Ⅰ部・第七章「花山たづぬる中納言」巻については、主に巻第二、花山たづぬる中納言を対象に据えて、その志向を裏付ける諸相を明らかにした。すなわち、花山朝の歴史叙述が『栄花物語』の始発に位置する村上朝のそれに先祖返りした様相（「天皇を基軸とする後宮史」）を呈するが、それは花山天皇の御代が九条流の発展と関わりがないためであり、結果的に天皇の個性が突出した後宮を描くことになったことを論じ、ついで『栄花物語』は『大鏡』と異なり九条流の繁栄の担い手が政治的意欲をあらわにすることはまれであるにもかかわらず、兼家・道長がそれぞれ唯一一度、当座の政治状況に鋭く反発する姿勢を示す点に注目して、当面する政治状況が九条流発展史の展開において重要な局面であり、二人の反発が『栄花物語』にとって自明の歴史の流れと見なされている九条流発展史

の具現であることを論じ、さらに巻第三、様々の悦において、「九条流の発展史」を受け継ぎつつ「道長の栄華物語」へと据え直しが図られていることを論じた。

第Ⅰ部・第九章「法成寺グループの諸相」は、『栄花物語』のなかで宗教的色彩の強い巻巻について検討を加え、そのなかで巻第三十、鶴の林が他の諸巻と異なり、浄土教への傾倒が著しく、道長の往生伝を作るべくその薨去が描かれていることを明らかにした。とりわけ、道長の臨終行儀の実践の場であった阿弥陀堂の位置づけに反映する、密教的傾向から浄土教へと変化する道長の信仰の変容を『栄花物語』がいつの時点と見定めているか、その点を追究し、議論の論拠とした。

第Ⅰ部・第十章「『栄花物語』の描く万寿二年」は、『大鏡』が語りの現在とした万寿二年を『栄花物語』がどのように対象化しているかを論じた。『栄花物語』は万寿二年を道長の薨去へと歴史の流れが大きく転回し始める年と位置づけ、生起する出来事に関わって、過去をふり返り、現在・未来を見据える当事者の存在が歴史叙述にせり出し、かかる複数の視点人物を導入することによって、『栄花物語』は万寿二年を的確に、しかも複眼的に捉えることができたことを明らかにした。

第Ⅰ部・第十一章「『栄花物語』続編について」、第十三章「『栄花物語』『大鏡』の時代区分意識」、第十四章「『栄花物語』続編と『大鏡』」は、『栄花物語』続編および『大鏡』が『栄花物語』正編の達成を相対化しつつ、どのような政治的立場の人々によって何を指して編述されたのかという関心のもと、『栄花物語』続編の歴史叙述の内質を追究した。第十一章は、続編の歴史叙述を丹念に辿り、続編は基本的に御代ごとに歴史を整理していることを明らかにした。その中であって、巻第三十八、松の下枝は、後三条天皇の治世を対象化するが、天皇の踐祚・即位を記さず、譲位は記すものの、次の白河天皇の登極は記さず、実仁親王の立太子のみを記すという変則的な叙述となっている。その点から、続編が東宮時代から関白頼通と不和な関係にあり、即位後、摂関家に対する掣肘を目論んだ後三条天皇の御代を対象化するにあたって苦慮していることが看取される。また後三条天皇の御代にその勢威が相対的に下落した摂関家嫡流が白河天皇の師実養女、賢子に対する寵遇によって復活する歴史の展開を、後三条天皇に殊遇された源祇子の出産および賢子の出産を記す際、ともに道長の外孫、敦成親王の誕生を寿ぐ正編、巻第八、初花を引用して、両者を摂関家の危機と復活を示す事象として関連づけることによって取り押さえている。かかる諸点を踏まえて、続編が摂関家嫡流周辺によって作られたのではないかとする推測説を提示したのが第十四章である。第十三章は、『栄花物語』正編と『大鏡』に見られる時代区分意識を探り、それぞれの歴史叙述の歴史分節化との関連、および時代区分意識から透き見えてくるそれぞれの歴史叙述の内質を明らかにした。『栄花物語』正編は、歴史叙述の志向が「天皇を基軸とする後宮史」から「九条流発展史」、さらには「道長の栄華物語」へと変化しているため、歴史の始まりとおしまいが首尾呼応していないこと、一方『大鏡』は万寿二年を語りの時間として設定することによって四十年にわたる語られざる歴史を抱え込んでいることを指摘した。

第Ⅰ部・第十二章「『栄花物語』から『源氏物語』を読む」は、『栄花物語』が描く四人の内親王の立后が、兄の皇統が途絶え、弟の皇統が皇位を継承する時、兄の血を、娘を介して弟の子孫の内にとどめることによって、弟の皇統に正統性を付与する皇統形成の論理に基づくものであることを明らかにしたうえで、ひるがえって『源氏物語』に敷設された

皇統譜に検討を加えた。『源氏物語』は、直系主義を貫きつつ兄弟継承を加味して物語世界を複雑化する皇統譜を用意して、史上の内親王立后とは異なり、途絶えることになる弟の血を兄の側に回収することを通して弟の血を受けた者の皇統への復帰を実現する、三代にわたる源氏立后を描いていることを指摘した。

『大鏡』は序・天皇紀・大臣列伝・藤氏物語・昔物語の五部構成から成る。天皇紀と大臣列伝は一体の歴史叙述と見なせるが、藤氏物語や昔物語はそれぞれ独自の歴史叙述を志向している。天皇紀・大臣列伝、藤氏物語、昔物語のそれぞれの位相を明らかにしたのが、第Ⅱ部・第一章から第四章である。第Ⅱ部・第一章「系譜と逸話」、第二章「類型化された伝の論理」は、『大鏡』の天皇紀・大臣列伝の歴史叙述の内質を解明した。天皇紀・大臣列伝の歴史叙述の骨格をなすのが系譜であるが、その系譜が道長を起点にして藤原北家の主流を明確化すべく組み替えが行われている点に注目して、天皇紀・大臣列伝は、道長の栄華から逆に歴史の論理を認定する道長至上主義の歴史が目指されていることを明らかにした。また各世代に基本的に三人の伝を据え、子孫の繁栄の有無を基準とする類型化された三つの伝の論理を用意して、各伝に三つの伝の論理のそれぞれをあてはめることによって、道長に至る藤原北家の主流が明示され、各伝に導入された逸話が基本的に伝の論理によって意味づけられる、道長至上主義の歴史叙述の内質をあぶり出した。第三章「藤氏物語の位相」は、藤氏物語にみえる后妃・外祖父列伝には、天皇紀に記される帝のうち唯一、宇多天皇が、また大臣列伝において藤原北家主流に位置づけられていた忠平が抜け落ちているのに注目して、それは宇多天皇の生母が班子女王で藤氏ではなかったことによるだけではなく、宇多天皇の正統性の問題と深く関わり、その問題を隠蔽すべく、しかも宇多天皇を介することによって浮上する班子女王と忠平との関係を踏まえて、『大鏡』は班子女王や忠平ゆかりの人物を語り手として設定していることを論じた。また昔物語は、天皇紀・大臣列伝が問うことを回避した宇多天皇の正統性の問題に向き合い、その正統性を明証することによって、班子女王と同じく皇族出身の禎子内親王を生母とする後三条天皇の正統性を根拠づける意図があったことを論じた。第四章「昔物語の位相」は、天皇紀・大臣列伝は冷泉朝を時代の転換点と見なし、一方、昔物語は朱雀朝を時代の節目とするのに着眼して、両者のとらえ方に顕現する歴史叙述の位相差を多面的に論じた。

第Ⅱ節・第五章から第七章は、『大鏡』の能信周辺作者説の可能性を追究するものである。能信作者説や能信周辺作者説は先学によって提唱され、しかも古説にも能信作者説が見え、また諸条件を勘案すれば能信が最有力であることはすでに定説になっている。それに対して別角度から能信周辺作者説を補強していく作業を開示したのが、第七章「『大鏡』の作者——能信説の再検討——」、第八章「『大鏡』の作者・追考」である。『大鏡』において本来、「なにがし」と呼称される士大夫クラスの人物が実名で呼称されているのに注目して、能信とその人物との関係を明らかにし、その人物の『大鏡』の歴史編述への関与の可能性を指摘した。第七章「『大鏡』の『栄花物語』受容」は、両作品における能信の扱いの違いが、『大鏡』が『栄花物語』を踏まえつつも、新たな歴史叙述を思い立った理由のひとつであったろうことを指摘した。また『大鏡』は撰関家傍流周辺、『栄花物語』続編は撰関家嫡流周辺によってそれぞれ編述され、両者の政治的立場の違いが少なからず投影されていることを明らかにした。